

福澤諭吉立案

中上川彦次郎筆記

# 士人處世論

完

明治十八年十二月出版



士人處世論緒言

人間の世々在る其爲すべき仕事は千種萬様ふして際限なかるべきに  
固より論あく此仕事の中にて孰れと尊しとし孰れと卑しとするが如  
きも唯人々私心の好惡する所に従ふのみにして天然の規則あるにあ  
らざるあり若し我輩の私心を以て假りに其尊卑を分たしめば人間社  
會々廣且大なる影響を及ぼす仕事を尊き仕事と稱し其影響の狭且小  
なるものを卑しき仕事と云はんとするのみ然るふ日本士人等の舉  
動を見るに世に官吏は職業ほど尊きものゝあしと心得只管仕官に熱  
中煩悶する其有様の見苦しきおもと傍観せるよも堪えざるものあり  
蓋し今の日本の士人等ハ封建專制の遺風に薰陶せられ人間社會々權  
を振ひ事と爲すは官吏と爲るより外に其道なしと固信してさては斯  
る無勘辨ある事とも爲して悔るよと知らざるもけあらんなれば聊



か其愚と陋とを恕るべき所なきにあらずといへとも左りとては今の文明の進歩と急ぐ日本社會の爲めに其害と遺そよとの甚ざ大ある決して黙々と附すべた事柄にあらざるあり依て我輩は本年九月より十月に亘り士人處世論と題して數日間時事新報紙上に此次第を痛論し當時大ふ朝野の高評を博したるゝ我輩の竊かに満足せる所なり今又通讀の便を謀りこれを一冊子に纏めて再刊したるも其微意亦日本士人の時にふと繙讀して永く處世の方向を誤らざらんほどを祈るふ在るのみ

明治十八年十二月

時事新報記者識

## 士人處世論

福澤 諭吉 立案

中上川彦次郎 筆記

我國後進の士人が兎角政事談と悦び立身の道と求るにも唯官途と就りんとのみ熱心して他に顧る所なく政府にても入用の人物づけば採用すれども左りとて限ある官員の席に限るゝ人と容るゝことも叶はずして之と打捨むければ熱心の士人は身の進退と窮し遂には謂れもなき事と政府と怨みて様々と説と作志或と一旦幸に志て官途に就きたるもののが政府の都合に由りて免職などにあればろの不平とますく甚だしく昨日までの朋友も今日ハ苦々しな間柄となりて何事に就きとも政府に反対するものゝ如し斯くての官民の間の調和と妨げて國のたために不利なり畢竟豆國に官途と望む者多ければこそ斯る忌

しき事情も生ずることなれど何とうして人々は心を他に轉へて其熱心と冷に玄政府と玄て政と爲すに自由自在ならし先人民も亦官途の外々悠々としく安氣なるべき工風はなきやと世の識者ハ常に之れと憂ひ我輩も亦共々心配する所にして扱名案もなけれども凡る人ハ心の熱と除かんとするに唯あれと除くのみとして永久々冷ならしめんとするは迫も行ひるべき事にあらず熱なれをキニー子と用ひて挫くの法もあれども後進生れ立身熱と挫くハキニ一子は能くする所にあらず左れば此輩は心事と一轉して政事外に向はしめんとするには他の場所に名利を得らるべき道を開くふと肝要あるべし即ち其場所とは工業商賣の事として苟も人民獨立の事業と執り利益を得て又隨て榮譽を耀りすみとを得れば必ずしも官途は一方に固着して執念深く之を求るにも及ばざるほどならん即ち是れ其人の熱をば其まゝ差

置き唯ろは熱する所は方角を轉するに法にして官民双方のために至極便利なるべしと信せ我輩が平生人に工商事業の利益を説き自から其身分を重ん玄て獨立の榮譽と維持すべしと勧るも其微意ハふの邊に在るものなり

右の官途の事業と民間工商の事業とを較べて民間の事業に從へと勧るものなれば爰に其本人は私の爲を謀りて當に然るべき所以の理由を説明せざる可ら老人の言に日本之官員の極樂國なりと云ふものもあれども是れは極端を評したるものにして信すべからむ一身出世の初より生涯過ぎて子孫は利益幸福と考ふれば官途必至しも極樂又あらず左に其次第を述べん

先づ第一と申せば官途と就かんとする者は勞は多くして功ハ少しひと云はざると得ず今の官途ふ熱する者の多きは世ふ隠れもあた事にし

て全國無數の後進生の仕官は如何と語れば應と答るのみふて否と拒む者は萬々一もあたことあらん併玄是れは唯官と好む止まる者あれども之を求め之ふ熱して若玄宿昔に志を達するを得ざるときは心ふ失望するのみならむ忽ち身の處方に困るとて煩悶する者都下々地方に蓋し幾万人に下らざるべし然るに事實政府の官吏任免の數を見るに一年僅に幾百も過ぎず故に官途も熱心して果して心願と達する者は統計表ころなげきとも千百中れ一たるふ過たず例へば一時寫学生等の入用に付試験の上にそこれと採らんと廣告すれば一名の入用のためふ募に應する者は五十名も百名もあり寫学生にしく尙斯の如し況して少しく上等の地位に於てとや官途に人の群集して失望者の多きこと推して知るべし而玄てこの失望者も何か他の職業も就て恒の業を營みながら傍に官と求る者なれば害あたふとあれども大抵は

無職業にて空玄く衣食し諸方と奔走して交際を求める又は知る人家に寄食し下宿屋に闊居玄闊なるが如く繁あるが如く詰る處ハ唯時節到來と待つの外ふ説あることあし之を喻へば東京市中の人力車の數三万に下らずして實際に客を載せて走る者ハ全數四分の一より多からむ他ハ皆路傍に四辻に群をなして晝夜とも客と待つものに異ならず人力車夫は平均玄く無職業なる者四分の三とモるも尙四人の間に一人前の仕事と分て働き、少くづゝの所得あれども官途心願の士人は百中一は僕僕を待ち一人前の仕事のためふ九十九人の働きと空うするものなれば其有様は之を人力車の客待に較べて及ばざるふと遠じと云ふべし西洋は諺よ時間ハ金なりとて一義果玄て違ふことなくば仮ふ此百人の熱心者と一社中として社員全体の損益を見たらば必ずろの不利なるを發明するをあるべ玄百名の社員ダ一年の時

間を空しく費すのみあらず周旋奔走のたれより多少に資金と失ひ又借金とも作り扱その出來上りは如何と尋れば僅に其中の一社員が籤あ當るふ過ぎず仮にこの當籤者が月給百圓と得るとせんか一年間一百人の現と費したる金と百圓づゝどし又その三百六十日の働き即ち時間の價と百圓とし合せて此資本と一年間に空うして得る所と月に百圓年々千二百圓より多からず資本二万圓に對する千二百圓は正と年六分の利子にて然かも其僥倖の當局者が不幸三五年に勤仕とて辭職せる等の事由きば元金の皆無と勿論、利子さへ不納の大損亡たるべ玄實の今の官途熱心者が銘くに勤むと銘くに失望し其失望は己れ一人の不運と見て竊に自から觀念すればこそ世間の人も知らざることなれども經濟論の主義に於ては無算の甚しきものなり

官途の出身に思を焦すハ貨殖經濟の主義に於て無算の至ありとのこ

とは前既ふこれを述べたれども尙ほ讀者の了解に便あらざめんがた先ふ一例と加へん例へば爰と理財に明なる金満家ありとせん主人の眼と以て幾名の人物を見立て各の見込と任せ又主人の忠告を授け之と何程かの資本金を貸渡して商工の事を起さし後數年の後にその者共が家と起すは勿論、金主も亦元利の返済を得て債主負債主ともに双方の利益たりし例は古今ふ珍りしらざれども今ふの金満主人が官途熱心の人物數名を擇び其出身の資本として金と貸すことあるべきや我輩は斷じて是れ無しと云はざると得ず固より世間の富豪にしてよく後進生の志と助けて之と資金と給して遂に其人物は官途と顯はれたる例はあきとも是れい全く商賣上の考を離れて他の關係より出來たる事にあらばれ、苟も資本を卸して隨くこれより生むる利潤を得んとする十露盤の勘定ふ於ては如何なる約束ふても官途出身の資

本金と貸すべからず又今日の實際よりて金貸商賣の人が士人の出身を抵當ふべしと貸したる者もなうるべし、等志く人物を見立てゝ商賣人あれば之を信用して資本と貸し官途は熱心家なれば之と疑ふて貸さうるは何ぞや其人物の才不才ふわらず又正不正ふわらず唯其事柄と見て一方は先づ安全として一方に甚ざ險危あきばなり抑もこの金満家は唯金の損益のみに眼を配るものあれば其勘定する所甚だ冷に志て所謂「クールカルキュレー・ショーン」なるものあれば必ず大誤るとはなりべからず然るに此冷算にていよ／＼危險なりと決定したる官途に士人の空しく群集して入るを求むるは何故あるや解モベウラガるゝ似たれども局に當る者は惑ふの諺又洩れ走士人の心事常に熱志く冷なると得毛首を擧々く政府を見れば富貴の人甚ざ少あからず官位高くて人に尊まれ月給多くして家内に苦情少なく然うも其勤は甚ざ

樂にして民間の稼ぐ者に比すれば天と淵との相違ありと云ふ尙ほみの上にも殘念ふ堪へざるは同郷竹馬の交際には常に我手下と志て泣きせたるもともあり又同窓學校の勉強に常に失敗志て黒點のみを取りし者が何ぞ料らん今日の政府の好地位と占め意氣揚々と志て人相までもむろしに變はり途中に顔見合せても知らざる者の如し彼れも人なり我固より人物あり何ぞこのまゝ又枯果んやとて熱心遂ふ判断の明を失ひ己れの人物の中位なると忘れ其藝能の少あたりを忘せ現に政府に好地位を得たる舊友の自ら才力ありて然りとの理窟と知らず仮令へ才力ハ不十分にても自クら官途ふ就きたる因縁あるものと其内實の譯を知らずして只管他人富貴に傲ハんとする妄想煩悶たるに過たず如何にも政府に好き地位を得たる者ハ一時誠に結構に志て目出度次第をども前々云へる如く其目出度き籤も當る者は熱心

者中百分の一か千分の一たるに過ぎず百千中の一と僥倖せんとする  
は投機の最も危きものにして之に近づくもれハ智者と云ふべからず  
我輩曾て云ふ爰に一奇人と出し毎朝府下何れの公園地へ凡る處を  
定めて人知れず五十錢銀貨と投玄置き市民の自由ニ此を拾ひ去  
るに任せたらば如何ある事相と生モ可キヤ昨朝は何町の何某が某公  
園の松の木の下ふて金と拾ひ今朝も亦何屋の小者が使の歸りに其邊  
にて拾ふたり十日以來毎朝然り銀貨天より降り来るとて市中の貧乏  
社會傳へ又傳へて老若男女幾千萬の群と成して松の木の下ニ騒ぐこ  
とあらん成るほど其群集中は一人は必ず半圓銀と得て愉快の思を爲  
す者あるべしと雖ども之を拾はざる者は失望は如何なるべきや仮に  
其失望者と毎日一千人とし半日と空ふして家に歸る其手間を平均二  
錢づゝとすをば正に二十圓の働き即ち騒ぎあり五十錢の僥倖のた先

に二十圓を費す、社會の經濟れた先ふ不利あるのみ其一人づゝの身  
のためにも永遠無窮の損亡にして斯る事に浮かれて騒ぐ者は無算の  
愚民と評せざると得す但し世の中に戯に金圓と樂る奇人もなし先づ  
事實に氣遣なき騒ぎにしそ唯我輩の空想に止まる事なれども天下後  
進の士人よして試みにまの空想と書きたらば必ず愚民の愚と愍笑モ  
るとならん我輩の保證モる所なりと雖も何ぞ異ならん大小の諸士が  
政府の筋に在る大小の官員と見て其地位と僥倖せんとするは彼の半  
圓銀の噂と聞傳へて空しく公園の松樹下に群集する者にして識者の  
嗤と免うるべううざるあり左きば我輩と素より士人の仕官と非とし  
妨る者にあらず苟も官途に適當すべき一種特別の才能と備へ又この  
途に入るべき固有の因縁もあり人ふも信せられ自分も信じ己れの  
望む所、一發一中必を誤らざるの見込み者ならを心をして唯政

府よ好き地位を求め以て一身の名利れた先にし兼て又天下公共のためにすべきも當然のことあれども其以外無數の士人にして出身の六ヶ敷きは世人の目にも其大概は事情と知り自分にも慥ふ請合難きはどの者ならば仮令へ何様の才智藝能ありと自信しても断じて官途の事は思ひ止まり一日も早く他の獨行私立の營業に身と轉すべきものなり

大凡そ事物は利害を判断するには其平均の數と據るふと肝要なり例へば古道具屋が種々様々の品物と仕入れて之を賣るに原價に二倍三倍迄時としては十倍することもあり此點より見れば諸商賣の中にて古道具屋より割の良たものはあし忽ち巨萬の富を致すべき筈あるとも事實に於ては決迄て然らば常に原價幾倍の利を見ざるのみか仕入れのときに鑒定と誤りて大損亡と蒙るふとも少なからず又その品物

が久しく自分の手に在る間に時の流行には後れ仕入の元金に之利足嵩まりて知らぞ識らずに原價と増との姿とあり初歳末と至りて店卸し勘定すれば矢張り尋常普通の商賣と異ならず其大利益と大損亡とを平均して餘る所のものと純益たるべけれとあり故に古道具屋いゝの大利益と當てにせよ又その大損亡をも恐きを常と平均の數を以て満足すると云ふ誠と左もあるべき事に玄てこれぞ商賣の本法ならん

抑前言は譬え申したるふと云して今あれを士人官途の出身に當てはめて説き明にすべく凡る天下の士人にしき宿昔青雲の志と抱くからには政府中最上の地位と登りて最上の名利と取るんと欲せざる者はあかるべしその趣は角力と志す力士が闘取と目的とせざる者なきが如し尤至極のことにして流石に士人の志の左ころゐるべし毛利元就

が天下に主たらんと祈りて能く一方よ主たるべしと云ひたるが如く男子の志は須らく大あると要すと雖も唯志れどが巨大よしても實際の處に少しく取留あくしては唯世人の笑け種たるふ過ぎモ故に志士も口には隨分大言を吐くも宜し、亦心に自うら信するも宜しと雖も極く内心には大丈夫を踏み矢張り事物平均は數に據りて彼の商人が損益を平均して其中程れ利益を目的にするの例に倣ふあと肝要あるべし即ち前にも云へる冷算「クールカルキユレーション」の法にして實際ふ失望の氣遣あきものなればあり扱ふの冷算法を以て官途功名の平均數を求るに今の官員は兵卒巡查閏村吏等を除きて凡そ七萬五千の數あり其収領する所の俸給は何と名くるとも本の出處ハ人民の納る租稅より外あらず即ち七萬五千の大小官吏之稅よ食む者にして其食稅の高は甚少なきものなり仮ふこの官吏をして月給八十圓

年俸よして一千圓を取らしめん歟、且が國庫は歲入七千五百萬圓は残らず官吏は俸給に遣ひ拂ふて餘りあるふとあざ固より實地に行はるべきにあらざれを一人一千圓は平均の數にあらず其半減よして五百圓にもならむ又四半減して二百五十圓ふも足らず我輩その精密の數と知らざれども或るは推算よ據れば大抵一年百五十圓より二百圓の間あるべしと云ふ今唯漠然と玄て官員社會を見渡し其上等の部分のみと計ふををこう月給何百圓に玄て結構なるが如く思はれども是を誠に其社會中の少數よして中以下よ至れば人數はいよ／＼多くして俸給はいよ／＼少なく最下等の如きと實に氣の毒あるほどものなり左れば官途熱心の士人がその宿昔の志と達して思ふがまゝ、よ出身の道を得たりと玄て其地位は何きの邊ふ在るべきやと尋る人物の才能次第、まゝ出身の因縁次第にて意外の好地位を占る者も

あるべきあれども才能も中等、因縁も中等の者ふそ多うる可ければ其多數の中等連は平均の數、一年百五十圓乃至二百圓の金と得ること、覺悟せざるべからず是即ち事物に大丈夫と踏むものにして若しも之より以上を期するは古道具屋が大利益の賣買せと當にするものに志て早晚一日落膽の時あるべきや疑を容れそ、ことを聞く英國政府ふての國民に所得稅「インカムタックス」を課するに一人一年の所得、百五十ポンド又足らざる者の免稅の法なりと云ふ百五十ポンドは我國の七百五十圓に當るが故、英國の人民は一年の働と以て家々七百五十圓の所得なけれど難澁者は部分と志て免稅の特典を蒙るに引替へ我官途社會の所得を平均すれば此難澁者も及そざるもと正に五百五十圓なり固より英國は物價高く志て金の位低く日本は諸色下直も志て暮し易しと云ふと雖ども官員の極樂國とまで稱せらるゝ日本の官途も

して之聊り驚かざるを得ぞ極樂の名稱虛なりと云ふべし

以上に記す所果志て數に於て違ふもとあくば仮令へ出身の道を得たる者にても左まで結構あるものあらす畢竟今の熱心士人が事物平均の數を忘れ平均の下と見ずして其上と詠め無理ある先例を我身も引當て、獨り天下の僕侍を専りにせんとするの空想より遂に失望の慘情に陥りて進退に窮るもとあれぞ我輩の願ふ所は其熱心の中にも尙冷算の一義と忘れずして竊自う前後を考へ果志て心に悟る所のものあらむ機と誤らず志て眼と他に轉するは一事に在るのみ官途の功名と平均をきば志士の身に取りて左まで香ばしきもの非ずとの次第は前にこれを述べたれども我輩の見る所にては仮令へおの平均の數を超へて頗る上流の地位を得る者ふても其一生涯の利害如何と考ふれば利する所は存外少なき者と判斷せざると得ず試に

其次第を云はんふ政府に好地位を得る者は世間に尊敬せられて俸給も亦豊なりと雖も官員は百年の官員とあらむ時として非職免職の事あるべし既ふ免職すれば世間れ尊敬は其日限りふ斷絶して顧みる者さへなき世の常あれば榮譽は永く頼むに足らずとして跡に殘るべきものと財物あれども是れ亦甚ざ覺束なし凡る世界中の各國文不文は區別なく政府の筋に賄賂の行はきざる國あらずと雖ども不思議ある我日本國の政府に限りて其沙汰を聞かず稀に或ひ之と耳ふするあとあきにもあらざれども實に稀ある場合に玄て海外諸國の風俗に比すべき雲泥の相違も啻ならず此點より見れば日本は誠に君子國に玄て他に誇るよ足るべし我輩よ於くも竊に肩身の廣き譯なれども當局官員の懷よ就て計れば入るものは唯俸給のみふ止まりて他に利する所あるなし然るのみあらモ官員社會ハ兎角表を張るものにして住宅

什器衣食の有様にても世間普通の割合よりも美を裝ひ一寸戸外に出ても官員あるがよ先にとて看すく餘計の錢を棄ると少なうらむ又例の交際あるものに金と費をは實に堪へ難き次第よして甲の家の觀花の宴ハ以て乙の別荘に納涼の會と促し冠婚葬祭送別に留別ふ、餞別に土產に、一に酬るよ二を以てし、二に答るよ三を以てその風にして其内實は互に相困ると雖も互ふ相止ると得ざるのより世事日に静なるよ従ひ交際は日に膨脹して際限なきものゝ如玄畢竟今の官途は舊藩士族の餘流と以て組織し錢の方には至て奇麗にして清貧却て有力の勢あるが故よ其一般に氣風に於て錢を輕んずるも亦謂れなきにあらざるあり斯る事れ次第なれば官員が在職中に金と溜るは極めて難きよとよして少數と除くの外は隨分外見は宜玄き身分の人にとって家ふ餘財あるものあく負債ある者ころ却て多かるべしと云ふ我輩に

於ても或は然らんと信するものあり

左れば宿昔青雲の志と達志て思ふがまゝに政府に好んで地位を得ても唯その在職中少しく家を賑に暮すのをして若し萬一も主人が中道にして病死する等の不幸あらば如何すべきや暗夜燈消えて家内の方向西も東も分ふぬことあらん農工商の家なれば戸主が短命の不幸に逢ふも其遺産遺業をさへ守れば婦人子供ばかりにて渡世するの例は誠に珍りしからざれども官員の死亡したものは恰も一家の顛覆と云ふも可なり或は死亡又非ずして普通の免職非職にても尙恐るべきものあり蓋し今の日本の習慣にて之政府の御用と民間の私用とは大に趣を異にし御用の取扱ひは都て大切にして些少の事柄にても人を勞し金を費すこと多し如何ある御用向ふもこれと民間の私に引受けたならば人數も金員も御用の三分一若しくも五分一ふて屹度請合を

りと云ふ者あり或は實に然ることもあらんあれども是れは政府の人か懶惰にして漫りふ金を費すと申す譯にはあらず唯御用向が大切ふして萬事萬端念に念を入れて鄭重ふ取扱ふがためふ自からなるのミ民間は事業の如く錢は儉約のため又事の体裁とも顧みず唯損益一方にけみ眼を注ぐものとは同日の論に非ず之と喻へは政府の御用ハ富豪大家の事として玄關より中の間、表座敷、奥座敷、臺所、茶の間、寢間、書齋の如く別にして相素れず之がためふいふの如く其掛りの人を配り掃除は掃除、取次は取次、表の給仕、奥の中、茶烟草盆出しやうより挨拶送迎に至る迄整然として版よ印したるが如く何等の事情あるも奥の女中が表座敷へ驅出し玄關の取次が寝間に飛込むが如き粗忽はあるべからず仮令へ臺所が忙いしくとも表は給仕に加勢を求む可らず客來に玄關の者は多事あるも午睡して在る掃除番よ援兵を命ずべか

トす是即ち大家に雇人の多くして入費の嵩む所以にして之を彼の貧乏世帯の臺所又飯と炊く下女が玄關の取次ふ罷出で、食客の書生が時として水を汲み又買物に走り、表座敷の主公の書齋と兼帶し、寢間の夜具除いて乃ち食堂に變するが如きもけふ比モ琵甚ざしき相違あれども貧乏世帯の目的ハ唯金を儉約するの一方に在るが故に事の体裁を顧るゝ遑あらず粗忽と云はれても甲斐ゞしく働かざると得ざるあり抑政府の御用と民間の私用とと比較すれば正しく此大家と貧乏世帯との有様にして多年政府に地位を得て職と奉したる者は彼の大家の雇人に異ならず仮令ヘ才徳兼備するも身又染えたる習慣は大家の習慣にして迫も之を貧家の事又用ゆ可らざるや明なり然るゝ民間の營業は中々劇しきものにして千變萬化臨機應變主人にして小者の作用とも勤先帳面方の番頭も常に賣買の相場ふ心と配る等成る丈け人

ト少あくして成る丈け費を省くと旨とし紙一枚筆一本の事にまで細に氣と付て俗に所謂大目ふ看過おすことゝてひ絶てなき慣行あれば正々堂々たる政府は事務に染込ミたる人が何として之ふ適ふべきや其これに不適當あるは諸禮の師匠と呼で火事場は手傳ふ用るが如じ時としてハ事の加勢には爲らずして邪魔にこそなる可きのみ之を要するに官途の人は唯御用取扱ひと名くる一藝のミヌ通達したる者又して之又通達すると愈々深ければ俗世界の俗事に愈々遠ざかりて實際に營業には都て縁のなき者となる可きと人心の定則よりて争ふ可らざる所なり左れば今官途ふ居て多年の経歷ある人ダ一朝の機と職を辭するときと何と以て爾後の身を立つべきや同志俗世界の事又して呉服屋の番頭が店と去く薬屋に行けば商賣柄ハ全く以前に異なれ共賣買は精神は同様あるが故ふ新事業ふ慣るゝと易しと雖も官員の

御用社會と普通の營業社會とは事の緩急正變相反對して相互に容る  
可らず忙はしき俗世界の者を政府中は閑散なる場所に入りても尙且  
當分は狼狽玄て用辨を爲さむ況玄て緩にして正しき事に慣れたる  
人物を移して急變衝くが如き民間に置くよ於てとや我輩いろの方向  
に迷ふことある可たを恐るゝ者なり故に云く官員は百年の官員ふあ  
ふぞ仮令へ僕侍にして好き地位を得たればとてその死亡又ハ辭職れ  
時の事と案すれば在職一時の榮華と香ばしきに似たれども民間の營  
業の満くして永續するよ若かず桃李花開くも風雨の夕あり我輩は後  
進諸士けために謀りて松柏の嬪娟ならざるも其の常青と愛するもの  
あり

門閥之世祿と相伴ふく離る可らず試に徳川政府の時代を見よ名家は  
子孫こそ甚だ多しと雖も苟も世祿なき者は世に名と顯はすと得ず何村

は何兵衛はむろしく何の國の太守領地は何萬石位は何位何某公の  
末孫にしそく系圖も慥々として祖先傳來の寶劍具足もあり既に去年は村  
の者をもを集めて何百年忌の法事と勤め本家の主人が一番に焼香し  
たりなき云ふ話ハ毎度聞くふとなれども悲しい哉その家に世祿あき  
やゑ又何と家柄を喋々しても矢張り尋常の土百姓たると免かきず或  
之諸藩士又幕臣は中にも名家の小臣あり新參の大臣あり拙者の先祖  
は家康公に鬪ケ原の御供と致して敵の首を七つ取りたりと云ふも今  
の家祿が僅ふ三十俵あれば三千石取る新參の大臣に向て平身低頭せ  
ざるを得ず唯家柄のみ然るにあらず爵位とても祿ふ伴ふに非ざれを  
光と放つを得ず封建の時代に京都の公卿の位ハ甚だ高くして世々正  
・爵位とく逆も武家の企て及ぶ所に非ざる者多しと雖も實の勢力に  
於てハ從五位下諸太夫たる大名に向て一言もあることを左れば門

閥との唯名家の子孫さる家柄のやうみ思ふ人もほらんあれども其實は決して然らず家柄ふ附するに世祿と以てして子々孫々みれに依頼し何様も不束ある人物にても衣食に差支なくして人へも衣食を與へその暮向た都て洪大あるがために自然に世に尊敬せらるゝあとみて其家柄も其位も世祿に由く光と生ずるものと知るべし是即ち封建の時代小凡庸暗愚の主人が幼少の時より教育もなく玄て惡しき家風又習慣を成しあがら能く大家を相續玄て無事なりし由縁あり世祿の力大ありと云ふべし

維新以後世祿の法廢して官途に在る者は奉職中の年俸月給を收領するのにして其身一代の祿をも得ず又有爵の華族を除くの外は位記さへ子孫に傳へざるの法なれば如何ある貴顯の地位ふ在る者にても仕官を罷めて身死をるときと何等の痕跡をも遺すふとなし幸ふ玄て

家に蓄積の餘財にてもあれば子孫も依て以て衣食すべきなれども左もあくして其人の存生在職中は生計、毎月毎年出入正に相償ひし者ならば子孫の唯尋常一樣の貧士族貧平民にして父祖又何様の功勞あるも遺族けためにハ毛頭の益と爲モベクらず蓋し是れ文明開化ハ大主義、國民ふのく其身の才力に食み曾て死者の功勞の蔭にいらざるものにして日新的天下ハ當さに斯くころあるべけれ我輩の常に稱揚する所もして之を彼の舊幕府時代に少しく手柄ある人が祿と世ふし官と世にし又爵を世にし甚しきと儒者醫師の輩が其學術と世にモるが如きものに比モれば年と同うして語る可らざるあり然るに爰に官途のた先に憂ふべき一事と云ふは我國の制度全く封建門閥の体を解きさりと雖も數百年來の餘臭は容易に洗ふべくらず玄て政府と人民との間柄を見るに上下尊卑に懸隔甚だしくその發玄て公用の文書又

現はれて文字の大小敬語の用法等は勿論、日常些細の事ふして政治ふ縁なき性質のものにても政府の筋と云へば一種特別の重みを附けて之を仰ぎ尊ぶふと封建世祿の時代に所謂る御上様の御用の筋をむやみに尊敬したるの風に彷彿たるもの少なうらず然り而して此政府の筋と代表せる者は官員なるが故に凡俗世人の見る所みて官員ハ一種特別に身分重き者と思ひざると得て旅行すをば道中旅宿の待遇市に出来ば諸商人等の會釋家に出入れ者ども雇の男女に至るまでも主人と崇めて殿様奥様御前様と仰ぐろの有様は必ず亥も其家の資産豊ふして人に錢と與へ又給金と多くするの故にあらず平民社會の旦那親方も官員社會の殿様も錢と費をあと同様にして人を見る目ヌ斯くも相違ある之錢の原因にあらず官員の方は其錢に伴ふに身分なるものを以てして殿様奥様御前様は尊稱を受け遂々平民との間に大なる

懸隔を生して恰も人種の相異なるが如き習慣を成したものあり扱又主人が殿様なれど悴は若殿様にして若様の威光も自から内外に耀くべには當然に勢よして夫れも世事ふ經歷ある老成人ふれを拙者も今おろ殿様ふれども本を思へる云々と獨り心に首肯うなづにて交際ふ加減もすることもあらんふれども二代目はへぬだの若殿様に於てぞ則ち然ると得ず周圍の持て囃しほ盛にして目下家は暮向むこうと豊なり仮令へ尊嚴が嚴然として之を誠しめ教へても教ふる功能は見く習ふの力に及ばずして何と工風するも子供心に自尊の念ひ絶つべからず如何となれば官員の官に在る間は平民社會と身分と殊にし貧富よ拘はらずして尊卑の人種を別にするが如だは公私の習慣事實よ於て明白なればなり畢竟數百千年我國の士族尊く人民卑くして其士尊民卑の遺俗が今い官尊民卑の姿に改まり官員の家に一種は勢力を生じく家人

れ心も自然に其風に化するもれなれば之を如何ともすべからざるなり抑も社會のためよ此官尊民卑は得失と論ずるは本論の旨にあらざれど之を略し唯一家の利害のみを云へば現在の官員の身分と俸給が子孫に傳へるものあきば在來りの家風をも其まゝに存し新に門閥を起して萬世安心なるべくれども今の文明は日本國に於てハ之と許さず官員の榮華は在職限りにして消えて痕なきと如何せん、家ふ世祿なくして家人ハ其身分の尊きよ慣れ、衣食の度低くしき氣位のみ高きハ之と子孫の苦痛と云えざると得ず近く其例と舉れば諸藩の士族が俄に家祿よ離きて今難澁には非すや士族にハ金祿公債證書もあり且その人物は決して愚ふらむと雖ども幼少の時より身分は尊たに慣れ家祿は豊あるに慣れ、我れは日本中にそ一種特別は身分の者ありと自から信じて人も亦これと許したるものが頗る其家計を顛覆せられた

るが爲よ斯の如きのみ今官員の辭職死亡は士族廢藩の厄に異あらず其在職中に家計のいよ／＼盛なりし者が後日の苦痛いよ／＼甚しかるべき舊藩士族の大祿ありし者が廢藩は後に一段の難澁と感ずると同様あるべし左きば後進士人が官途に意氣揚々たるものを見て羨ま玄きよ堪へざるが如くなるは壯年の血氣よ尤も至極あれども壯年は百年の壯年に非ず永久に子孫の謀を爲したらば官途必ずしも羨むに足らざるの事實と發明することあるべし况や人生之官途の外に成すべきの事業取るべきの功名甚ゞ多くして然かも其事業功名こそ永く天下後世に痕跡を遺そべきに於てかや古人言あり寧ろ鷄口たるもの後たる勿れと、政府の尾に附て國民の租稅と食ひ其資本に依頼して事と爲さんよりも一身小ありと雖とも奮て獨立の事を行ひ以て文明男子の名に愧る勿れ

士人處世論の一題は今後の後進士人ダ世を渡るに當さる斯の如く身を處したらば然るべきとの道と示さんとするものにして其大要と繰返して申せを後進諸士が其志と政治の一方に専らに玄て身の落付く所は唯官途との目的を定め限りある政府の地位に押掛け押込まんとしては無限の人々に有限の地位、とても治りは付かずして諸士の失望すべきは勿論、政府に成替りて考へても頗る仕方もある次第にて唯政と行ふに困るより外にある可らず左きば士人の官途熱心は官の爲にも私の爲よりも甚ざ面白かぬ事なれば男らしく身を構へて官途出身の事とば斷然思ひ止まるべしと云ふの論緒より彼の極樂世界と稱する官途も虚心平氣に勘定を立て所謂冷算と以て利害損益の出入と差引すれば餘り香ばしき職業に非すとく其次第と述べたり初讀者諸君にて官途の一方に熱心をむは官私兩様のために不利なりとの義はみ

れと合點したり然らば則ち官途と斷念して如何に身と處すべしやと質問の起るは正と當然順序と玄て之に答ること或は難からんと思ふ人もあるべきなれども我輩の所見にては決して難事に非す唯あれと答へて尋常普通の商賈工業に従事せよと返答するのみにく澤山あるべしと信す或は諸士の考にて商工の事は難くして計算上と割に合はずと云ふ歟、我輩質問する所のものあり第一その事の難しとは何故ぞ、諸士は少年の時より書と読み理を講して本身を苦玄先冬は長た夜に眠るを知らず夏の暑き日に汗と揮ひ艱難辛苦したるのみあらず其艱苦のいよ／＼甚ざしけをばいよ／＼ふれに堪るの勇氣と生じて遂に業と成玄たる者にあらずや今この艱苦に堪るの勇氣と轉玄て直とこれを商工の事業に用ひたらんには何事ゝ成る可からざるものあらんや試に今の現在古風の商工社會を見よ如何なる人物の在るあるや

彼等が如何なる艱難を忍んで如何ある勇氣を振ひ如何なる聞見に富みて如何ある智略と運らざつゝあるや、艱難に堪るの勇氣、世態人情に通するの聞見、機に臨み變に應するの智略、都て吾々實學者の下に在るふと數等に玄て與に語る可き人物に非ず斯の如き無識凡庸輩に玄て尙且商人なり工業家ありとて居然自から得意の顔と爲して世に處するふ非ずや商工の事決して難うらざるあり又第二ニ商賣工業に利益なしとは最も請取り難き話るれば議論よりも眼前に其實例を出して之を示さん諸士は都鄙は市中と往來しき路傍の店頭を見るは毎度記事ならん吳服屋あり酒屋あり紙屋あり烟草屋あり問屋小賣見世千差萬別計ふるに遑ひらぞ然り而して此輩は何を衣食せるやと尋れば官員の如く月給を収領して稅に食むゝあらず華士族の如く公債證書と貰ひたる者又あらず貧富大小の差ころびをども全く自力を以て自か

ら衣食せるものに玄く即ち其營業に利益あるの明證なり又諸士ガ金策金談の言と聞くに其指名する所の者は大抵商人もして例へ心東京よても麹町區も官員多く玄て日本橋區に商家多ければ金と目指す所ハ月給の集る麹町も在らぞして商賣の繁昌する日本橋ふ在るは何ぞや商賣は力は月給の働きよりも大なること推して知るべし

右の如く商工の事は左まで艱難に非ず又利益あき者もあらぞして諸士が之に從事せるゝ臆病なるは其罪唯事と知らざるの一點に在るのみあれ共知らざるより知るれ門に入るゝ諸士の既に實驗を經ざる所にして其一例と擧れば諸士は素と漢儒者流の子孫にして祖先以來或は其自身に於ても前年は西洋文明の何事たると知らざしうども時勢の變遷、斯くては世に處すべからず逆大も奮發して西洋は事に眼を注ぎ或は西洋の書を讀み或は西洋の人々に交そり又或は身躬から西洋

諸國より往來して親しく其事情と視察玄ますく彼の社會に仕組み心醉して一切萬事彼の國の流儀に倣はんふとを勉め今は心身ともか變化してむかしの漢儒流たり玄時を思ひ出せむ全く同一の人とは認められず即ち曾て西洋の事情と知らざるの境界より之と知るの門に入りたるものにして其働きは活潑なるは實に驚くべき次第ならずや然るに今漢儒流より西洋の文明流より遷りたれども其文明は唯學問又政治の區域のみに限りてこの區域より一步と轉すると得ず商工の事は君子に知る所非也、知らざる事には近づく可らずとて自ら縮み上りて手も足も動うし得也とは何ぞ先に勇にして後に臆病なるや我輩は其理由を解くふ苦しむものなり或へ今の後進士人に考に商工は賤業あり君子の執るべき事にあらずとて竊に愧る意味もあらん歟、其は業は賤玄きにあらずして之を行ふ人の賤しきのみ從前の如く

無識卑屈ある素町人の輩が殖産の世界と専にすればよろ賤しくも見ゆるふとあきども苟もろの事が教育と受けたる君子の手ふ歸するときへ次第ふ体面を改めて遂々君子の事とあるべれや又疑と容れず故に諸士けために謀るに民間殖産の事業と見てこれを賤玄き小人の事と玄く避くるよりも自ら進で之を執りその事業と君子にするふそ肝要なるべけれ

ふの點より考れば我輩は獨り後進生のみと責めずして先進の老成人ふ向ても所望の箇條ありと申すハ今の老成人もむかしは壯年有爲の人物として社會に立身を求めたる者ありしダ其これを求るや例の如く官途の外に安宅を見ず最初は程は其人も西洋の説と説き不羈獨立斷して自力に食以て社會の通弊を矯るなど由々しき言と放つと雖をも顧みて官途を見て好地位あれば之に就て宿志を伸ばし功名と成

資産もあるべきなきば我輩は特に之に向て一奮發と所望せざると得  
ず如何となれば其人の履歴最初より官途と好まずして之々就き又は  
好んで之々就きて得意たりしも其得意の時は既に通過て今は無聊に  
苦む程の有様なるが故に幸に其身に附きたる名望と才力と資本とと  
利用して純然たる商工社會に新地位を占め全く官途に離別して獨立  
の事業を起すときは其身に利するのみならず率先の實例を後進生に  
示して其銳氣を引立てるの功能實に洪大なるべけれをあり老成人の言  
と聞バ云く吾々は年既に老しさり何も社會に望む所あしと云ひなが  
ら其所在は尙官途あり仮令其身一代ハ是にて相濟むものとするも先  
進の舉動は後進之を學ぶべし先進後進次第に相學び天下後世の人々  
皆今の老成人々微ふて唯無事閑散とは是を求て恰も官途に隠遁するの  
工風をあしたらば此社會を如何すべきや後世のたれ我輩の深く憂る

すと常とそ是をは人々の了管次第時の宜きに従々身の方向を定め以  
て男子の事を爲するものなれども或は其心に官途と欲せずして唯餘義  
なき事情なるもけゝ追られ斯くくの次第、云々の譯にて遂に不本意  
ながら例の安宅ふ歸する者も亦少なうらず蓋しろは不本意とは虛に  
設けて云ふゝあらず眞實の不本意あることハ我輩も傍より敢て保證  
する所あれども彼の餘義あき事情の力甚ざ強大にして之ふ抵抗すべ  
からず即ち其事情は枝葉と除て正味と煎炙詰るときは生計の一件に  
して差向きの要用のために官に就くもれなれば素より己が志と達せ  
んとするの目的にもあらず又或は既に政府の要處に居たる者が其處  
と去るに當り斷然冠と掛るよりも閑散氣樂の地位とて散官と就き  
至極靜に日と消する人も甚ざ多きが如し此種類の人は世間に名望も  
低くかゝず身ふ才力もありて今は久しく官に在ることなれば多少の

所にして況て今日の時勢、民間ふ爲すべくして爲さる可らざるの事業甚だ多き場合に當り此流の老成人を閑却するゝ國の爲に惜むべし長老の先輩に對して失敬の至なれど敢て其考案を煩はすものなり

○士人處世論（續）

日本は官吏は極樂國にして苟にも官途より就くまとを得れば第一御用向は民間の仕事と違ひ餘り劇しくもなくして毎日出勤退出の時刻もあり其前後の時間を利用すれば私用を達するよ餘りあり日曜の全日と土曜の半日あれふ加ふるに暑中の休暇半休暇年始年末の休日等を以てして民間の繁劇より較れば官途の一年は僅ふ民間は六箇月に足らずと云ふも可あり第二ふは月給に差等あり其少なきものは誠に少なきと雖も日本人の才能に割合すれば平均して少なうらず如何とあれば如何ある小官にても之と求めて之に群集し大抵の事情にては辭表と差出さるのみり免職と恐るゝと甚しおと見て其給料の尙ほ豊あると知るべければなり第三よりは官途の人は錢の外ふ無形の權力あるものありて世間に對するの顔色甚だ高し殊に田舎地方にては官の効力最も著しくして苟にも官員様と云へば之と接するの用向の公私と問はず一種特別の人種の如くに取扱ひ例へば平民と官員と等しく錢を拂ふて同席に飲食又は角力芝居あそ見物する時にも其場より双方相對すを年齢の長少を問はず、家の貧富と問はず又ろは人物の智愚と問はず唯一方は官員なるが故にとて之を崇め尊ぶまと實に不可思議とも申そべき様なり尙これよりも著しき奇觀は官員様が蒸氣船車の下等より乗り素町人土百姓が中等上等に乗り船中車中は上中下の差別嚴重にして上等の客の錢丈けに光り、下等は下等丈けに窮窟不自由なりと雖ども扱ふの客人が船より上陸し車より下るときは忽ち顔

日本は官吏は極樂國にして苟にも官途より就くまとを得れば第一御用向は民間の仕事と違ひ餘り劇しくもなくして毎日出勤退出の時刻もあり其前後の時間を利用すれば私用を達するよ餘りあり日曜の全日と土曜の半日あれふ加ふるに暑中の休暇半休暇年始年末の休日等を以てして民間の繁劇より較れば官途の一年は僅ふ民間は六箇月に足らずと云ふも可あり第二ふは月給に差等あり其少なきものは誠に少なきと雖も日本人の才能に割合すれば平均して少なうらず如何とあれば如何ある小官にても之と求めて之に群集し大抵の事情にては辭表と差出さるのみり免職と恐るゝと甚しおと見て其給料の専ほ豊あると知るべければなり第三よりは官途の人は錢の外ふ無形の權力あるものありて世間に對するの顔色甚だ高し殊に田舎地方にては官の効力最も著しくして苟にも官員様と云へば之と接するの用向の公私と問はず一種特別の人種の如くに取扱ひ例へば平民と官員と等しく錢を拂ふて同席に飲食又は角力芝居あそ見物する時にも其場より双方相對すを年齢の長少を問はず、家の貧富と問はず又ろは人物の智愚と問はず唯一方は官員なるが故にとて之を崇め尊ぶまと實に不可思議とも申そべき様なり尙これよりも著しき奇觀は官員様が蒸氣船車の下等より乗り素町人土百姓が中等上等に乗り船中車中は上中下の差別嚴重にして上等の客の錢丈けに光り、下等は下等丈けに窮窟不自由なりと雖ども扱ふの客人が船より上陸し車より下るときは忽ち顔

色と改め曩きの上等客も下等の旦那様に向て平身低頭せざると得ず  
實ふ人間世界の奇觀なりと雖ども是れダ今ハ日本國中の風俗に玄て  
強ひて官員の方から威張るゝもあふずして四方八方より迎へて之と  
威張ら玄むるゝ是非あき次第と申すべきのミ

右は如く日本の官途之甚た割合よきものふ玄て之に就くものは實又  
難有仕合なるダ如くなきども極々その内幕又入りて内情と探れ心外  
より見たるほど左程に結構あるものにあらず御用が劇しからずして  
餘暇ありと云ふも其餘暇は存外役小立たずして是れまで官員が公用  
の餘暇又期る大事業を成したりと云ふ話も聞かず詰り人間の身は樂  
あきべ樂に慣れて又そば樂事に忙はしきふと見ゆるなり又月給は  
割合が宜しと云ふも唯目先きの事に玄て其割合が宜しければ他に割  
合の悪しき附合もあり人の知ふざる出費もあり決して手取りの純益

たるべからず論より證據には今の官途社會に金穴は稀にして清貧の  
君子多きと見て知るべし又官員様は甚ざ尊玄と云ふも其尊さやむか  
玄え如く世祿に伴ふたる尊位にあらざるが故に一朝の榮華は牽牛花  
の花の麗は玄きに異ならず其身終るゝ又ハ辭職免職の災難降り来る  
ときは前ハ榮華は却て心と惱すの媒介となり親類朋友に面目なきの  
みか家内けものに對しても何となく身巾狭くして人に云ハれぬ苦痛  
は如何ばかりなるべきや是等れ事と前後思慮分別すれば官途決して  
極樂世界にあらず樂中苦の種子と孕み苦樂相半玄て初めは吉玄終り  
は凶しと判斷せるも可なり過日時事新報の士人處世論(九月二十八日  
以下の社説)に此邊の事を記して看客諸君ハ既に一讀せられたるあと  
あらん就て之世間の有志者も家に一錢の資産なく玄て身に相當の才  
能を抱き然かも不幸又玄て其才能ダ唯官途一方の注文に應すべく玄

て東西南北、身の振向けゝ窮乏たる者は格別あれども廣き人間世界を見渡して何か自力に叶ふ仕事もあらんふゝ其方に取て掛りて永久獨行私立の人とあらんあと我輩の冀望に堪へず官尊民卑と今け日本の風俗にして血氣の壯年輩がこれ有様と見て人に威張らるゝよりも自から人に威張るの身分たらんとて煩悶するは至極尤もなる次第なれども此風俗は唯わが國封建政治の餘襲ゝく永く續くべきものゝあらず官途え事固より尊し官吏の身固より重しと雖とも唯政事上ゝ就て尊重なるのみに玄て扱一國の仕事は政事のみにあらず商賣工業學問の事一も大切あらざるもはあくして其大切なは政事は大切なるに異ならず左ればこの大切な事と執る商工の人又學問の人は其尊重あるあと官吏に較べて少しも相違あるべからずとのふと誠に明白至極の事實にして西洋文明の國々にては今更怪玄む者もあけをせも

唯我國の文明は年齡尙や若だがために封建時代の稚き臭氣を脱せるあと能はず玄て今の如き奇妙なる風俗を見るのみ、文明の進歩の矢の如しいよ／＼進歩せるに従ふていよ／＼商工學問の尊きと知り之从根本にして國を立るに日決して遠きにあらざきば民間の人々隨分その身と大切に玄て自ら我身と重んずべきものなり

人民自ら自重しそ官途牽牛花は榮華と慕ふ勿れとの次第の前にも記したる處なるが、之に付き我輩が思ひ當りて愚ありと評する者は各地方田舎の人物ありつら／＼田舎の様子を見るに郡區長書記町村吏みど申そ輩ひ大抵其土地にて相應に財産あり名望あり又才智ある者にして官撰民撰の法にて推舉せられ採用せらるれば是非あき次第、何も人間世界の務あれば奉職も然るべし殊に郡區長などは給料も餘り少なからざるが故に無產の人には隨分一時の生計なれども其以下ふ

至てハ月又十圓か二十圓ある者は稀にして三五圓ある者ハ甚だ多く  
 亦或は一家の衣食に足らざるのミカ主人ひとりは費ふも覺束あき次第  
 あれども此小給にも拘らず甘んじて職に就き數圓の月給のために一  
 箇月と繋がれ毎日事務に忙ハしくして平氣ありとハ解す可らざる勘  
 定の數あらずや甚だ怪しむべき又似たれども其内實は事情と尋れば  
 此輩が奉職するは素と錢のために非ず唯外聞外見のためにして何長  
 とか何書記とか云へば所謂官員様の如くよ聞え世間への押出し何と  
 か威丈高くして愉快に堪へず即ち其愉快と買はんがためふ家事を  
 打捨て心魂と碎き風雨寒暑をも厭はずして出精相勤る者多しと云ぬ  
 之と聞いてます／＼不審に堪へず本來その人が眞の貧窮か又は樂隱  
 居れ流にして僅に三五圓金にても之と以て家の計を助け又老後の樂  
 みにするなどのみとなれば尤ふも聞ゆれども家に相應の資産もあり

て主人の年齢は分別ざかりとも申そべき偏強の男子が大切な家産  
 経済の事をば打忘れて其行く末は何とする了管あるや何村の戸長殿  
 は月給五圓、公務忙ハ乞くして時々集會等の事もあり或は縣廳に出頭  
 乞て滯在中は同僚その他の交際もあり一月の月給ハ一夜又費乞て足  
 らされば都て持出乞とあり三年の奉職に堅固ある身代も動搖して危  
 しと云ふが如きは其例も少なからず無分別も亦甚だ乞きものなり人  
 間萬事金の世の中ふありて金力即ち榮譽面目とあるべきは文明進歩  
 の定則ふして我日本國も今正にろの方角に赴らんとするの最中、各方  
 の人も専ら其邊に心を用ひて先づ自家の私と富まし集めて以て國  
 の富強の源を深くするふそ今日の急務なれ既にわが政府が近來意を  
 銳くして人民に節儉勉強を勧るも其邊に深意あることあらん而しく  
 ろれ勉強とぞ何ぞや利益は割に合ふ仕事と勉るけ義よりも外ならず

然るに人間實際の仕事に大小あり人物に才不才あり不才の人が大事ふ當りんとするも固より叶ふべきとにあらざきを是れハ議論の外として扱才力ある人物ふ仕事を授くるにハ其力に相應すべに著ヒ撰ぶと甚ざ肝要ありとそ之を軍事に喻へて云ヘバ小隊長あり中隊長あり又大隊長あるが如し即ち隊長たる者の才力に應して人數を授くるものにして小隊長の力ある者ム大隊の人數を渡すハ固より危きふとなれども左れをとて大隊と指揮モべき人物を小隊長に用るも亦甚ざ不利なりと云はざると得ず如何とあれば人オ乏しき世の中に幸にも大隊長の才と得たるに之に任するに小隊指揮の事を以てするは恰も其人の働く四分一を利用志て其三分を棄るに異らぞ即ち萬圓の金を二千五百圓に通用する者あればなり左れば此人物が何ほど勉強して何ほど巧に兵士と用ひても詰る所は小隊の人數なれば其勉強の四分の

三ハ全く無益にして勉強せざる者に等しと云ハざると得モホの利害果して人事の實際に相違なしに於ては今日各地方にて家の資産厚くして事業甚ざ忙いしく例へば地價幾千幾萬圓の田地山林を所有し自家に人夫と役して耕し又小作に貸し或之酒造の業を營み又は質屋問屋の店と張り出入り繁く之ふ眼を配る者ハ唯主人一名にして主人の家に在ると在らざるとの損益ハ毎日の帳簿にころ記す可からざれども年の終ニ之と計りて不在の年と在宿の年と比較すれば驚くべきほどの相違と見出すべく實ム主人ハ一身は一年幾百幾千圓ヌも當るベキ其大切な身分と以て計ふるにも足らざる月給を領收し忙はしく公用に奔走して私用を留守にするハ所謂勉強と空うるものにして大隊長が小隊の指揮に忙はしきが如し仮令ヘ其身には閑暇なくしく勉強しさる積りよても經濟の點より之を見れば公私兩様のためには不

勉強ある者と云はざると得ず然かのまあらす勞して報酬あき仕事に身と慣らして其際に私の産を破り榮譽權勢の本源なる金力と失ふて一時の方向に迷ふ尙ろの上にも日本社會は日又月に金の世の中と爲り金さへあれば天魔鬼神も之ふ降伏するの時勢に立至るべき其日に於く昔年の吾と思ひ出し彼の財産が其まゝほりしならばと後悔するも益なかるべきものあり

我輩は前日は紙上に地方田舎の人物が交明け時勢を知らず徒に官途の尾に附て公私の經濟主義と忘るゝは愚なりとの次第と述べたをども斯く云へばとて我輩の微意必ずしも公用を賤としてこれに従事する者と邪魔するゝ非モ唯貨殖經濟の點より見て公用私用又論なく家の貧富人々の才不才に從て各その力を盡すべし、仮令へ公用なれどとて自分の經濟のため又利益なき事あれば之と勤るよりも他に仕事

するこそ身の榮譽にもなり又天下富強の基もあるべしと論する迄にして此論旨既によく讀者の耳に達したらば爰に又地方は人物に警戒むべきものあり即ち其地の富豪とも稱すべし家の子弟又父兄が動もすれば家を棄て又家と移来て都會に出で大に方向を誤るの一條なり血氣の壯年が都會に慣れて田舎を嫌ひ都下の學校に入りて卒業でもすれば諸方又奔走して官途を望む者少なからず是れさへ我輩の常に大に悅をざる所に玄て學業成るの後は早々故郷に歸りて父祖の遺業を繼ぎ又自かゝ新事業を起玄所得は學問と田舎の土産ふじて之と家業は方便又用ゆべしとは毎度みれを語り又紙に記したるもともある其最中に地方富豪の少年子弟あらで其父兄殿が折く出京して官途を窺ふの様子は誠に以て驚入りたる次第にこそあれ官員社會の威張りて景氣よき其外見又心醉し吾も景氣又仲間入せんものとて

家業も打忘れ財も打棄て恰も夢中に熱心志く彼の所謂牽牛花の榮華と慕ふ者は逆も物の數と以て説くべにあらず唯後日其人の失望しと自ら後悔するを待つのみ外を玄地方に居れば幾巨萬の資産家にして衣食身に豊あるのみならず勢力の及ぶ所甚ざ廣く玄て恰も無位無官の地頭とも云ふ可き重き身柄の其人が何省の何等出仕か甚ざ玄は何等屬よ玄て月給僅よ何十圓と謹で頂戴いた玄て得々たるが如きは全く數の外の考に出でたる者と云はざると得ず試に爰に額面一萬圓の公債證書あれば利子の歳入七百圓あり之と十二箇月又割りて月給にすれば殆ど六十圓又當り屬官の最上、或は奏任御用掛りの俸給とも耻ぢず田舎大人に一萬圓の公債證書を所有する者は甚ざ少なからず座玄て其利子と請取りて別々本業を營むべきに此公債證書は東京漫遊中即ち官途熱心中並に都鄙に往來友人へ交際又は止むを得ざる

義理合は貸金等に用ひ盡して今ハ祖先傳來の田園も其全壁に少しく瑕を付け扱その出來上り之幸に何等出仕何等屬とハ冥加至極難有仕合あるべにや我輩は唯その無算無分別に驚くのとの事あれども今一段を進めて地方の人にも少しく利害損益の數を曾算する者あればならず其曾算に云く我家に幾町歩の田地ありく小作米二百俵八十石の價五圓相場にして四百圓、この田地と共に山林を併せて賣却すれば凡そ六七千圓は資本を見るべし此資本と携へて東京に行た住宅に千圓を費玄残りの六千圓と一割二歩に運轉すれば年々七百二十圓の利子あり之を活計の根本として乃ち官途と求先我力よく百圓以上の地位に就くふと易し、百圓より百五十圓ふ昇り又飛で勅任三四百圓も難からむ即ち殿様奥様なり卿も亦不同意なうらん逆夫婦相談の上數百年來の不動産を賣却し二三の子供を携へて都下に移りたる其謀の進で

成らざれば退て六千圓の資本に依頼そるは兩端にして甚ざ大丈夫あるが如くなれども官途の例の如く空位少なくして故郷お在りし時ふ在京の友人より得たる手紙の趣と全く相違そるのみならず去年自分が出京して何某殿に固く約束しるまとも今日忘れられたるものゝの如し我力ふ易しと思ひし百圓の地位の既に已に斷念して五十圓も尙ほ容易に來らず多方に奔走依頼玄て好き返詞を待つこと一日三秋の如くに玄て百日三百秋を過ると雖とも音も響きもなし左りとて郷里の朋友親戚に對玄て遙々面目なきのみか直接に玉の輿と約束しる細君にも違約の罪あると如何せん是に於てか彼の六千圓の根本に立戻りて運轉を試み其運轉いよ／＼活潑にして失敗も亦いよ／＼活潑の色と現はし富士山の白雪も旭日に照らされて消モ況や田舎大人の資本金が都下の高利社會に露出して投機熱界は狂風に吹きるゝよ

於てとや忽ち消散して痕跡あきふそ氣の毒なき窮鳥枝を擇ふふ遑あらず今且とありては何ぞ地位の好否を論せんや厚顔にも哀と知己の門に乞ふて僅に細官出仕の榮を辱うせるれみ是等の慘状を毎度我輩の竊に聞く所なれども世間の人の廣くこれを知らざるは當局者が自ら自分の失策と語るべきにもあらず又傍よりその事情を見ても一個人の私に係ることあきば誰れと名指して新聞紙に記そ者もあく以て事實の多たと掩ふて無事の如くに見れるのみ之に反して赤手田舎の幽谷より飛出し七轉八起さま／＼の苦樂成敗は後終に宿昔の志を達じて喬木は梢に得たる者なきふ非ず其實は極めて稀有の例にして千萬中の一あれども其評判は甚ざ高くして世間の耳目に觸れざるはなし蓋し地方の富豪大人が今日よても頻りに東京に官途の出身を求るゝ此千萬中の一例と聞傳へて一發一中と誤り認るふとあらんあ

れども其實は萬發一中に過ぎず之に欺くるゝは智者の事にあらざるなり譬へて賣ト者又依て吉凶禍福と占ふが如しその中らざるときは依頼者の常の情として人に語る者少なきが故ニ世に知る者なしと雖とも偶然に中るあとほきば凡庸の喜ふ堪へずして之を聲高々言ひ觸らし何某の易は實に神易あり何月何日何事又就て一占一中斯の如玄と事實を擧げて之を證玄て世間の耳に達する所は占ふて中トざるみとあきものゝ如し是即ち無學無識の愚人が賣ト者ふ群集して常に竊に失望する由縁あり今田舎大人が千萬中一例は立身を聞傳へて萬人皆然らんと思ひ込み可惜郷里の財産と賭にして都會に浮かれ出す其愚鈍は賣ト者の店又跪いて吉凶の判断と依頼するの愚に等しきのみ我輩は之れを傍観して竊り又捧腹せざると得ざるものなり

經濟論に於て動産、不動産、金錢及び人の勞力藝能等を以て資本と名く

るは普通のことなれども又一説ふ據れば人の信用榮譽も亦資本ありと云ふ者あり例へば下等社會に金の利足は甚ざ高く玄て上等社會に行はるゝ大金の貸借は則ち然らず貧乏人は金ふ對して信用薄きが故に利足も自然と高くなるべきの譯なり上等の大家にては求先て金を借用せざるにか他より之に金と預けんと申込む者ありとも容易に承諾せず預けの期限が短くては面倒あり期限長くも多く利足と拂ふては迷惑あり云々と我儘千萬のふと云はきても貸方は立腹もせず何分宜しくお頼み申すとて金主の方より手を下げて托するの勢なるが故に斯る大家みて商賣と營むふは其資本を得るあと甚ざ易く玄て利足と拂ふよとも亦甚だ少あし之と彼の薄資本の人が百方に周旋奔走玄て少々の金を借用し裏表に打て返へして利足の高下を考ふに暇あらざる者に較きば大ある相違と云ふべし而しこその相違は何よ

由て然るやと尋きバ 大家の主人に信用あり榮譽あるダ故ありと答る  
は外あるべからず左れば人間居家の經濟に於て他人の財産を側量し  
又自家の貧富を計算するにも唯目に觸れ手に執るべき動産不動産又  
ハ金錢等れミを計へ上げく何程と締高を見るは尋常の法あれども未  
ざ盡したるものあらず 經濟の本旨とあれば此締高の外に必ず其家  
に屬する信用と榮譽の多寡を勘定せざる可うらざるなり  
右の經濟は道理が果して事は實際に相違あきものならば前に云へる  
田舎の大人ダ祖先傳來の不動産を賣却して官途を志願ス都下に出で  
んと決心志たるときには其價と時の相場にして六千圓と積り斷然他  
人に譲りて遺憾なたが如く思ふ可けれども是れニ唯目見見るべき  
有形の資産と賣りて代價を請取りたるまでにして數百年來の地小  
住居し恰も一種の地頭の如くにして遠近の人心を歸服せしめたる其

信用と榮譽は無代價よて棄てたるものと云はざると得ず、從來田舎は  
大家よて富を積むは法は至て緩漫として農業に人と役するよも商業  
に物を賣買せるふも法律と道徳とを半分づゝ調合して兎角人氣と背  
かざるを旨とするが日本國の風俗なるが故ふ其地の家柄とあれば小  
前の者共は之と仰くこと主家の如くにして平生の恩に報るに律儀を  
以くもるは意味を含み大家に利を得るよとも少なければ貸借等の  
事に就く間違ひも亦少しくしく其際に言ふべうらざるの便利あるい  
我輩の能く知る所にして當局の人の現に其便利に依りあがく之を棄  
てゝ惜しむ所あること其無算無分別唯驚くに足るべたのミ田舎の大  
人若しみゝに疑ひを我輩仮に一策を設けて其可否を君に質さんと  
そ我輩幸にして家に十萬圓金あり東京の住居は俗にして面白からず  
田舎の閑静と樂しむの傍に貨殖の念も盛なをば此十萬圓と田舎に移

して田地を買はんとす、近來は地價下落志さるよしあれば一反歩の價平均四十圓として十萬圓の内八萬圓を投じて二百町歩を得べし即ち二三箇村中、全權の一大家、小作米の収入も年に幾千俵も下らをして儼然さる小地頭あり尙ほ残りは二萬圓は相當の利子を約束して其地方遠近の貧乏社會に貸付け負者は悦び此方には利あり亦美ならむや此策果しく如何と質問したらば君ハ之と賛成すべきや我輩もその必ず然らざるを信す、君若し我輩に對して深切の情あらば必ず此狂策を非して云く田舎に地主とありて大門戸と張るは一朝一夕の事に非ず數十百年來種々の關係、様々の因縁を以て土地の人情風俗と知り其人情又従ひ其風俗と破らずして冥々の間に恩と施し惡と懲らも積年の恩威又依りて地方一般の信用と得ればこそ富豪大家と仰がれて自から家も安く財産も固きとあるに今都下は金持が突然其資本金を移して

即日より舊地主と一樣の地位を成さんとするが如きハ無算の甚ざしき者にして其資本に對するの利益を見ざるのみか數年と出でずして元金を併て一蕩するは禍に罹るべきや疑を容れず從前既に其例もなきに非ず云々とて只管我輩の企と止めて丁寧ふ其非を忠告せらるゝことならん扱ふの忠告もして果敢て事實に適中して違ふあとあくんなば今我輩はことを逆み志て地方の大人が不案内なる都會に出でゝ不案内ある官途に熱中志一事の成るあくして祖先以來の資産を蕩盡すること都下の金穴が田舎の大門戸たらんと企てゝ彼の十萬圓金を擲つが如くする勿きと忠告せるもれより外あらず大人必ずしも我輩の言と耳にすると須たずして自ら發明する所のものあるべし、人間の信用榮譽は容易よ得べきものにあらずして之を利用することも亦易うらず非常の英雄に非ざるより外は先以て其地方を重んず都會に得

たる信用榮譽は之を都會に用ひ田舎に得たものへ之を田舎ご利用玄  
て身を誤り家を破るよとなき者これと中人以上の智者と申すあり  
我輩の今の後進士人が心を一にして唯官途のみふ志すを好まず殊に  
地方の財産の豊なる大人が祖先以來家に固有する有形無形の資産と  
空うして都會に出で貧書生と共に仕官に熱中するが如きは富人にして  
貧人の爲を學ぶの無算無分別の愚も亦沙汰の限りなりとの次第  
前既ふ之を述べたり斯く論すれば田舎の人之何時までも田舎より住  
居しく都會と交通を絶ち都會の風を知らず又他の地方の消息を聞か  
ず唯田舎の井戸の底に居て質素儉約飲まず食へぞ見ず聞きずして金  
さへ溜まれば則ち可なりとの意に會釋玄て血氣の壯年輩は不平を抱  
れ去りとては地方の人民に政治思想の發達、覺束なし又田舎に蟄居し  
ては兎角時勢又後れて人品迂闊に陥るほど多しなど憂る輩もある可

ければ我輩は念のため此輩ふ向て爰に一言するも不用あらざるべ玄  
と信せ抑も我輩が地方は富豪に勧先そ田舎と去る勿きと告るは祖先  
傳來大切ある田園を棄てゝ都會に彷徨し牽牛花の榮華に等しき官員  
の地位と求先然かも其花の最も小なるもれと家産の最も大なるもの  
と交易せるが如きは損亡ありと云ふまでのこととして斯く云へると  
都鄙の交通と絶つて意味とは解モベからぞ數百年來田舎の富豪が  
一村一落小天地の外を知らむ玄て封建政府の壓制に収縮し才智わき  
ばとて其智は戸外よ馳そると許されモ資産あればとて其資力の自身  
肉体の用ふ供そるよ過ぎぞ實に政治の思想に乏しく又その働きもな  
かりしは明白なる事實に玄て今日の文明世界にて其まゝふ差置き  
難し是非とも其思想の發生と促すふと緊要なりと雖モも扱ふれを促  
かすの法如何モべきやと尋るときは必ずしも其人を導いて官途に入

るゝの要用なきが如亥本來政治の思想とは一國の人民が其政府に對するに關係之如何なるものかと之を吟味し政府の權力の及ぶべき限りと人民の權力の伸ばすべき限りと其分界を明ふ亥て相互ふ其境を守り相互々侵入と許さず法律上々政權の在る所は政府の領分にして如何ある事情あるも人民ふ一毫の苦情を許さぞ法律上々人權の存する所は人民は領分にて如何なる事情あるも政府ふ一毫は我儘を躊躇せ、苟も法律と外きては双方相互に取りもせず與へもせずして相對し共に一國は榮譽幸福を目的と亥て文明に進歩するもの之を政治の大主義として尙やこの外にも國々の習慣、時々の事情も區々なれば之を知るふは學問と勤勉交際と重んず博く内外の著書新聞紙等と讀み又内外の人物々交り又世間の事情を視察亥く可が知見と聞くふと最も肝要なるが故に封建時代に行はれたる地方蟄居の遺風は固より之

を守るべからずと雖ども其書を讀み人に交るに事は必ず亥も人間の奇行と云ふべきものふあらず昔日の田舎は農商等がこの邊に迂闊ありしこそ實は奇妙不思議なるふとなれば今の人にして之に心掛るは誠々當然の義務にして又その方便とも乏しからず我輩は最初より地方の人物と頼み甲斐ある者と信用して疑はざるものあるに然るを今其人が神妙ふも私立獨行亥て官途に冷あらんとすれば同時に政治の思想と失ふあらんとく傍より之と心配せるが如きは本來政治思想は何ものたるを知らず所謂役人根性と免かれざる者の私言にて其心事の賤亥きまと推しく知るべし

又地方の田舎に居れば兎角時勢よ後れて迂闊に陥るとは是亦謂れなき言にて實は其發言者が時勢を知らざるの罪なり三十年前に東海道五十三次ぎハ十五日を費亥江戸より長崎四百里の往復は三箇月に

ても覺束なく、大坂への文通六日限りの状賃は一封金二歩(保字小判)の半分あり、として川留をば十日にも達せずと云ふが如き時勢あらば成るほど田舎住居は蟄居にして容易に旅行も叶はず奥羽の人人が肥後薩摩と見たることなきのみか肥後の人が薩摩に入ることも難く、江戸の人へ生涯川崎へ三里の旅行を試みずして江戸に死し、兄弟相去るもと五十里幸便ふ任せて年に一度の手紙を得けば涙と垂れてこそと悦ぶなどの奇談もあらんなれども畢竟時勢又後るゝとは直接間接に亘が耳目の達する其区域の外に新らしき事の行はれて其事と知らずと云ふの意味なれば其耳目の区域と廣くするの方便さへあれば時勢に後るゝの憂かるべからず而して其方便とは何ぞや蒸氣船車と電信郵便と又今の日本にて馬車人力車も中々以て有力なるものなり何れも人間交通の利器として之を利用すれば日本はむうしの日本にあ

らず我輩今日武藏國に住居せる身を以て見ればむか志の日本六十餘州と武藏の一國ふ縮小したりと云ふも可あり去れば地方の人物が所謂時勢ふ後るゝことを憂ひあバ汽車汽船と乗り足らざれど馬車人力車と用ひて思ふ所と往來し郵便と用れば日本國中十日以内に書狀の達せざる所なし電信あれば即日に世界の消息と聞くべし况や近來ハ各地方にて道路を開くとともに頻りに玄て鐵道も亦工事を始むるもの多くに於てとや巧にこの交通の便利を用れど今日の吾々と之も身に羽翼を生じたる者にして三十年前の先人が蠢爾として芋虫よりし不自由と慙笑せざるを得ず斯る劇しき交通の中と居あがら地方の住居は何故よ時勢よ後るゝや若しも然る事實もほらば其は田舎住居の罪にあらずして其人へ心身は不活潑なるに由るもけあり心身に活動ふき鈍物あれば仮令へ之と東京の中央に置くも時勢に伴ふことハ叶

ふべりうす左をば地方の田舎に住居して時勢あ後るゝとの説は世の事の變遷と知らず三十年前田舎と想像して今尙ほ殊更に不自由と書き、容易き活動を試みずして態と自から蠢爾さる者なれば地方有志の人々は斯る陳腐説に欺るゝふとあく自力と以て其地に文明進歩の謀を爲そべし郷里の不文と口實に設けて都下に彷徨し竊に官途の小地位と窺ふが如きは男兒の事非ざるあり

士人處世論 終

明治十八年十一月廿七日出版御届  
同 年十二月 出 版

〔定價金十七錢〕

大分縣士族

石川半次郎

〔東京日本橋區通三丁  
目十一番地寄留〕

拔萃兼出版人

本局

東京日本橋區通三丁目十一番地

時事新報社

人と生きては新聞紙を讀まざるべからず新聞紙と讀まざれば世上の事に眞聞あり世上の事に眞聞みては目盲も同様あるべし

# 時事新報

便錢一枚  
稅一六金  
箇箇三  
時月月錢特  
金前○事  
廿金一新  
六三箇  
日報錢圓月報  
一四前定  
廣箇十金價  
錢錢錢  
六六七八六二日告年錢六  
錢日以上料金〇十  
五日迄上  
錢厘錢  
五五六七十五日以前  
錢錢錢  
四八三二日迄  
厘五厘厘  
五五六六上冊  
錢錢  
一五九八日迄  
厘厘厘  
四五五六  
錢錢  
八二六四厘厘厘

